

一、人くひ馬を、なおすべき次第、けんれんのぼう(棒)二尺六寸、六かくかしら四寸二分おんべいのしだれ一尺二寸、此おんべいをバ、六角頭を七寸さげて付也  
薬に云、一、大すかり、一、ふとからすのわた  
いずれも、せむして、い(猪)のあぶらにておし合  
て六角かしらにぬるべし、其後馬を  
つよきたづなにて、つなぎ、けんれん  
をかくしてよるべし。馬いかつて人をく  
わんとする時、後けんれんにてつき  
いため、口に八寸七分おしこめて、暫置  
べし。其後かげん、有口伝  
一、くつわ、すまふにも、後けんれん用也  
尤、鞍すまふにも用也。口伝ニ云、けん  
れんに、おんべいを付るは、か様につき  
いたみ、其後馬の、毛(気)をおそれしたがふ  
といへども、けんれんなき時ハ、すこし  
いかり、ひるまんとす、か様のとき、腰ニ  
おんべいをさし、よれば、馬已前(以前)のけん  
れんと心におそるる也

独臥之事

一、さしなわを、一しよに引合て、口の内へ  
二筋引いれ、つぼへとおし、口のうちへ薬糸を引入て、かうかいにしましてゆう也  
しめて後、南無きつくたたくこと百廿  
ぺんする也。か様にいんじゆ(印呪)をすり  
て、くちのなわを引つめて、つくこくに  
はさみて、其後、人かかりて、こゑをかけ  
まへ足をとりてふする也。すこしも足を  
ぬくこと、あるべからず。則ふする也、薬と  
云ハ口伝有也。心得いづれも如此口伝多  
有り

桑嶋新右衛門尉 仲綱

鈴木主膳介

道重

水沢清五郎

文禄四乙未 二月五日 実秀

青柳与六郎殿

進覧